



留学先で見たこと聞いたこと

～オーストラリアのパースに2回目の短期留学～

熊谷 祐作 産婦人科

大学院博士課程2年の熊谷祐作と申します。妊娠羊の胎子を使った胎児生理学研究に従事しております。私は7月2日から8月1日の1ヶ月間、オーストラリアのパースにある西オーストラリア大学(The University of Western Australia; UWA)、School of Women's and Infants' Healthへ2回目の短期留学に行き参りました。短期留学報告は珍しいと思いますが、簡単にご報告させていただきます。

オーストラリアの家畜といいますが牛が有名ですが、羊の生産も多く、中国に次いで世界第2位です。羊は秋に交配、冬に胎子の成長、早春に出産というサイクルの家畜動物であるため、妊娠羊を使った研究は秋から早春にしかできません。オーストラリアは日本と季節が逆のため、6月くらいから妊娠羊が手に入るようになります。UWAには専用の大型動物実験施設があり、6月～8月に妊娠羊を用いた胎児生理学研究を集中的に数多く行っています。この研究時期を“sheep season”と呼んでいますが、sheep seasonになると我々東北大チームに加え、アメリカ、ヨーロッパ各国から研究者がパースに集まり、様々なプロトコルを皆で協力して遂行しています。当院とUWAが共同で研究している人工胎盤の研究も

その中の1つとして実施されています。

日豪チームのメンバーですが、UWAのMatthew W. Kemp教授と当研究室から“長期”留学中の新生児科医である臼田治夫先生が中心となり、sheep season前から実験準備を下さっています。今年のsheep seasonには日本から新生児科医の埴田卓志先生、渡邊真平先生、佐藤信一先生、産科医の齋藤昌利先生、高橋司先生、私の計6名が滞在期間を少しずつずらしながら参加しました。UWAの方から我々東北大メンバーのために一軒家をレンタルして下さっていて、共同生活をするのが毎年の恒例です。食材を買って自炊を協力してやるなど、さながら部活動の合宿の様にワイワイと男臭い日々を過ごしました。一番学年が若い人が2日に1回のペースでビーフステーキを焼くので、昨年、今年と2回経験した私は、オージービーフのミディアムレアの焼き方もバッチリになりました。

日々の日課ですが、だいたい朝8～9時から羊の手術を始め、ランチは決まって東南アジア料理をテイクアウトします。人工胎盤の術後管理が無いときは皆で18時頃に食材の買い出しをしますが、術後管理がある間は新生児科医がつきっきりで当直をす

るため、私も皆の夕ご飯の準備をして21時までお手伝いをしていました。今年は2人の新生児科医が48時間以上当直していた時がありましたが、不眠とストレスフルな環境で働き続けたために人間の限界に到達しているようでした。

手術以外の私の仕事は、妊娠羊の胎子もしくは人工胎盤下の胎子を超音波で毎日評価し、成長と循環機能の変化を調べるというものでした。妊娠羊に対するエコーはヒトのそれに比べ大変骨を折る作業で、今年は30頭分こなしました。周りの先輩方が、こんな大変なことは誰もやっていないから必ず論文になるぞと励ましのおかげで、私は頑張ることができました。また来年も妊娠羊エコーがあると思うので、気が減る部分もあるのですが気合を入れて頑張ろうと思います。

滞在中に、東北大とUWAの共同研究・人材交流が始まって10周年を記念したパーティーがパース日本国総領事館で開かれ、呼んでいただきました。公のパーティーに参加するのは初めてでしたので、良い思い出となりました(写真)。

言葉の壁は大変厚いですが、院生の間に少しでも英語を上達させて、来年の留学の際にはもう少しコミュニケーションを楽しめればと思っております。

留学報告としては下記のサイト「東北大学総合周産期母子医療センター 新生児科指導医養成事業」にも当研究室の新生児科医の先生方が体験記を載せております。ぜひ覗いてみてください！

<http://www.ped.med.tohoku.ac.jp/newborn/lineup/uwa.html>



在パース日本国総領事館での祝賀パーティー (下段左から2番目が私)